

「な、なおお、うわあ!」「なあおふうん、こ、濃いいつよお!」

「直哉あ、あつうつ」「直、うむう……」

何度も何度も腰を痙攣させ、激しい打ち出しを繰り返し、もう精巢内のあらゆる種を出しつくすような感覚が、少年の意識を包みこんだ。

飽きもせず打ちだされつづける白辱はゼリーのような濃厚さと、水鉄砲のような勢いで麻倉四姉妹の美貌と乳房を白く穢して収まらない。

(うわわ、全然とまらない……)

焦れに焦らされた後の解放感はとても長く、ゆつくりとした時間だった。そのすべてが終わったのはどれくらい後だったのだろうか。

「ご、ごめんなさい……お姉ちゃん……あの、僕……その……が、我慢できなくて」直哉が恐るおそる四姉妹に近づくと、四人は直哉の精液を浴びて惚けていた。

「なお。うう、やっぱり男の子だね、あんなに力いっぱい……私のこと……」

「直くんがぎゅってしてくれて、お姉ちゃん嬉しいよお……あううつ」

「直哉が私を……あんなに……ち、力いっぱい……抱きしめるなんて……」

「直……のすっごくはげしくて、すてき……だったよ」

直哉は乱暴にすぎたと思ったが、どうやら姉たちはかえってそれが嬉しかったよ



うだ。

「でもね、なおつ。一人だけそんな勝手に気持ちよくなっちゃうなんて、ダメなんだぞ。お姉ちゃんたちが頼つても大丈夫な男になるなら、ちゃんと考えなきゃねっ」

「ご、ごめんなさいっ」

「へへへえー。いいよ、許したげる。だーかーらーっ、今度はお姉ちゃんたちを気持ちよくするんだぞ」

「ね、姉さんっ！ そう言つて、自分一人で気持ちよくなるつもりなのねっ！」

「へへへ。違うよ、安心しなさいって。パイズリの次は、やっぱりこれでしょ？」

香織がおもむろに立ちあがる。そして香織は自分の陰部を、まだ力強く屹立きつりつしている直哉の肉棒へ沿わせた。

「ふわあああああああつ、お、お姉ちゃん、そ、それえっ！」

直哉は肉棒を殴られるような重い衝撃に、のたうちまわりそうになる。

「これなら……んっ。みんなで気持ちよくなれるでしょっ！」

つまりそれはマンズリだった。

二人の美姉の股間を噛みしめるスクール水着の股布、そして臙脂色えんじいろの刺激的なブルマがちょうど上体を起こした直哉の目の前いっぱいにひろがる。それがいつせいに、

直哉の勃起へと付着してきたのだ。

「はああああん！ な、直くんの熱いい」

「ああ……。直哉のが、すごく……。ああん……。ブルマはいてるのに、すごく気持ちいい」

「直お……。あううう！」

直哉は目の前に火花が散るような感覚に目眩を覚えた。

「へへへ、どうだー。なおお、気持ちいい……。ンッ、はあうんっ！」

美しい四姉妹はまるで自慰をするかのように、弟の巨根に陰部を擦りつけては今にも狂ってしまいそうな喘ぎをもらす。

（あれ、どうして……。ああ、なんか硬い感触が、コリコリしてる……。これ、なにっ!）  
直哉はパニックに陥って、目を白黒させた。

四人が股間を擦りつけてくる。するとまるで小石のような硬いものが四つ、肉棒の熱情を早く押しあげようと、鋭い刺激を送ってくるのだ。

「はああああん！ お、お豆……。ああん。なおの、オチ×ポの出っ張りで擦られると、はうううううン！ ンき、気持ちいい……。っ」

紺色のスクール水着から濁った愛液が滴り、直哉の亀頭に振りかかってくる。敏感

な亀頭粘膜は簡単に痙攣けいれんしてしまう。

（あううう、頭おかしくなっちゃう！）

直哉はどうかこの四つの豊潤な恥丘から逃れようとするのだが、そうしようと思えばするほど姉たちの肉筋を擦ってしまうのだ。そのたび姉たちの興奮を誘い、湯気がたってもおかしくないほどの愛蜜が容赦なく直哉の肉柱に降りかかる。

「ああああああん！ 直くううん！ 激しい……そんなお姉ちゃんの、オマ×コに擦りつけちゃだめよお……っ！」

「直哉あつ、はあうん、う、うごいちゃ……ひいい！ だ、だめえよおおおっ！ お姉ちゃんのお豆そんなにしたら、が、我慢できなくっちゃウウウ」

「直……！ 直お……ッ」

（そうなんだ！ この硬い感触って、クリトリスだったんだ！）

少年は女性の性感帯のあまりのふくらみ具合に、いつの間にか逃れることも忘れて、その硬さに夢中になってしまう。そして一度魅入られればもうめちゃくちゃだった。

肉畝にくうねのおしくらまんじゅうの快感が、直哉の脳天で逆巻く。そして心が嵐に巻きこまれるようにうねり狂う。やがて姉弟たちは快感を求めるあまり、互いの身を無意識のうちに近くにいる人に無差別に擦りつけはじめるのだ。